

<特別寄稿>

大年邦雄先生を偲んで

齋 幸治*

本学会の発足から現在の発展に至るまで、多大なご貢献を頂きました高知大学教授大年邦雄先生が、平成26年1月27日にご逝去されました。その二か月前に、学外の研究会で一緒させて頂いた際には、いつもと変わらぬご様子で、活発な議論へのご参加、鋭いご指摘を述べられておられ、病も快方へ向かっているものだと思っていましたので、この報せが届いた際には、驚きや悲しみを通り越し茫然自失となりました。最後のお別れとなりました告別式には、県内外を問わず数多の方がご参列されました。改めて大年先生の多方面でのご貢献に、心底からの敬意があふれ出すとともに、地域、高知大学、そして私自身にとって偉大な指針であった先生との早すぎる別れに、胸を刺す痛恨の念を抑えることができなかつたことが、つい昨日のことのように思い出されます。

大年先生の学術上および地域・社会貢献の場における多大なご実績は、ここに申し上げるまでもなく、専門学術分野の方々、地域の土木・建築分野の現場に携わるの方々には周知のことかと思えます。南海地震への予備対策が喫緊の課題となっている近年では、豊富な防災工学の知識と経験を基に、学内外の啓蒙活動にご尽力され、地元テレビ局や新聞紙面にも数多くご出演されていました。ご病気の発覚以降も、学内外の業務に精力的に取り組んでおられ、大学教員としての使命を最後まで果たそうとされていたお姿が強く印象に残っています。

一方で、私を含め関係の皆様が大年先生を思い偲ぶ際に、まず心に湧き上がることは、先生の大きな、それは大きな男気と、すべてを包み込むような温かいお人柄ではないでしょうか。「気は優しく力持ち」という形容は、まさに大きな体躯と繊細な心遣いを併せ持った、大年先生のためにあったような言葉です。私が高知大学に着任して間もない頃、慣れない日々の教育・研究業務に戸惑っていた際には、先生から暖かいご助言を多く頂きました。先生のおっしゃった、「お前を採用したのは俺たちだ、責任はとる。だから存分に仕事しろ。」という言葉に、幾度励まされたことかわかりません。また、着任より先生からは、数多くの「仕事場」をご提供頂きました。先生とともに、鹿児島県と論島へバカンス…ではなく調査・視察に訪れたことは、とても良い思い出です。その他、ご紹介頂いたため池管理やダム・河川管理の現場等々は、現在でも私の主たる研究業務のフィールドとなっています。若手の教員にいつも気かけ、仕事に没頭できる環境を整えてくれる、そんな先生は我々にとって決して大げさではなく職場のリーダー、いえ“親分”と言える存在でした。

教育の現場でも、学生からの絶大な信頼と人気を集める“親分”肌を発揮されていました。学生主催のソフトボール大会では、他の誰よりも気を吐き、誰よりも遠くへ打球を飛ばすため、外野の守備位置を深くする“大年シフト”なるものが学生間で作られていました。一方で、ボーリングの達人な女子学生にスコアで負けたことがよっぽど悔しかったらしく、何度も再戦をお願いするお姿も拝見し、大変失礼ながら少年のようなお茶目な一面ものぞかせた、そんな微笑ましい一場面も思い出します。授業においては、学生の興味を駆り立て理解を促進させるような素晴らしい授業をなさっていました。授業1コマ90分間、学生の関心をそらさないように、時には冗談を織り交ぜながら、創意工夫された授業デザインは、今でも私が授業を行う際の最良のお手本となっています。持前の人間力によって若い世代とも強く繋がっていく先生の教育は、我々

*高知大学 教育研究部 自然科学系 農学分野 准教授

大学教員が目指すべき一つの理想であると思えてなりません。先生がご病気のため入院された際には、卒業生から先生のご体調を心配する多くの連絡を受け、告別式にも県外から多くの卒業生が参列しました。彼らにとっても、大年先生は一生の恩師であり、これからも慕い偲び続けていく大切な存在なのだろうと思います。

最後に、私事にわたり恐縮ですが、先生から頂いた数々のご恩を、ご生前に形としてお返しすることのできなかったことが痛恨の極みです。これから続いていく人生の中で、先生の果たそうとしたご使命を引き継ぎ、日々一生懸命な汗をかいていくことで、わずかばかりでもそのご恩へ報いていきたいと強く思っております。

大年先生、本当にありがとうございました。先生のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

(原稿受付 2015年3月3日)



先生と学生との記念撮影
平成24年4月、高知大学物部キャンパスにて